

## 序 言

シンポジウム企画者

村田雄二郎（東洋文庫研究員・東京大学教授）

公益財団法人東洋文庫では超域アジア研究部門の中に現代中国研究班を設け、今日グローバルなパワーとなりつつある現代中国の動態を、政治・経済・国際関係・文化などの領域から総合的に考究する活動を展開してきた。本シンポジウムは、現代中国研究班の研究成果を対外発信するとともに、さらなる研究の高みを目指す一階梯となるものである。

近年、現代（当代）中国研究の分野では、檔案（アーカイブ）の公開・整理が、程度の差はあれ、各国・各地域で急速に進みつつある。こうした現状を踏まえ、現代（当代）中国研究の現状と今後の方向性を探るべく、国内外から第一線で活躍する研究者を招き、基調報告と特別講演、および「戦後東アジアの国際関係と檔案（アーカイブ）」、「大衆・集団・国家」、「檔案資料から見る“中国”の内と外」の3セッションを設けて、報告と討論を行うこととした。各報告では、各種資料の現存・整理・公開の状況が具体的に紹介されるとともに、アーカイブを使った最先端の研究の現場が実践的に示される。

タイトルに掲げた「アーカイブの内と外」とは、檔案とそれ以外の文書群、中国語文献と外文資料、中国研究と中国「外部」「周辺」の研究、文字資料と非文字資料、文献研究とフィールドワーク等の幾層もの対比を念頭に置いている。また、檔案や行政文書などの「ハード」な歴史資料と記憶やイメージなどの「ソフト」な遺産との関係を問うことも視野に入れている。さらに、各国・各地域で蓄積された檔案の精査を通じて、当代中国研究における横の地域比較を試み、同時代的な問題群の発見を導くことも、本シンポジウムの趣旨の一つである。

## 基調報告「アーカイブ・記録・記憶」

### 民間史料と中国現代史研究の人文志向——華東師範大学現代文献史料センター収蔵品についての所見

張 濟順（華東師範大学教授）

民間史料は、まさに発展しつつある中国現代史研究の中で、ますますその価値と潜在的な重要性を示しつつある。すでに多くの大学や研究機関、学者個人が、民間史料の収集・発掘・整理に尽力しており、華東師範大学東方歴史研究基金会現代文献史料センター（以下「センター」と略す）はその代表である。

「センター」は2014年10月に成立したが、「何もないところから始まった」わけではなく、華東師範大学中国現代史センターと冷戦国際史センターが長年積み上げてきた堅実な基盤があり、所蔵する民間史料と冷戦期の各国の檔案の数量・規模はすでに相当のものとなっている。

「センター」が所蔵する民間史料は約5,400巻あまりで、150万ページを越える。現在すでに目録が完成し、電子データベースに入力した民間史料は10万件近い。

2009年から現在まで、華東師範大学中国現代史センターが編集し、東方出版センターから出版した『中国当代民間史料集刊』は11種17冊におよび、さらに2種がまもなく刊行される。



すでに出版したテーマごとの史料以外に、量・種類ともに膨大な「センター」の収蔵品については、特色が鮮明で、比較的系統だったテーマごとの檔案整理をすでに開始しており、順次開放して、利用可能としている。テーマごとの史料はおおよそ5つに分類される。末端単位と郷村の檔案、毛沢東時代の各種政治運動に関する檔案、公安関係資料、内部資料、個人資料である。

民間史料の発掘・整理・運用は、中国現代史研究の人文志向〔人文的なテーマへの関心〕を増大させた。

「中華人民共和国檔案法」の檔案についての定義に従えば、民間史料は民間檔案とも呼べ、「檔案内」の資料に分類すべきである。しかし一般的な意味での公的な檔案と大きく異なるのは、民間史料のうち最も量が多いのが社会の底層のパノラマ式の実録であり、ナマの、真に迫った、生き生きとしたものだという点である。内容のみならず、表現形式の面でも、公的な檔案の及ぶところではない。

民間史料の「内外兼ね備えた」特徴は、末端単位の檔案に最も明確に表れている。これらの「小人物」の運命を握る檔案の中から、上層の公的な記録の外にある底層社会の政治的状况を読み取ることができる。

個人の所蔵する工作ノート・日記・手紙などの資料は「センター」の民間史料の中でも注目を集めている。こうした貴重な「自家製の歴史」を心をこめて保存してきた檔案の主には、中国共産党の著名な高級幹部だけでなく、末端の「木っ端役人」も大勢おり、さらに多いのは名もない一般庶民である。

個人に関する貴重な歴史資料は現代中国史の解説に新たな道を提供する。「大から小へ」、ミクロな社会や個人の歴史の「真実」に接近すること、そこには「個性化」と「現場感覚」あるいは「臨場感」が含まれる。マクロな歴史的な巨大な変化を個々人の人生の物語に読み替え、複雑で変化に富む人生模様が「小社会」の中で展開されるさまを通じて、はじめて大きな歴史が、単なる国家の全体史、全体主義・革命・近代化といった中国現代史の解釈枠組にとどまらない、そして日々力が衰えることない、新鮮な価値と意義を現わすものとなるのである。

## 日記と中国近代史研究——『蒋介石日記』を例とした検討

呂 芳上（台湾中央研究院兼任研究員・国史館前館長）

中国近代史学界においては、近年個人の日記を出版し、日記を歴史研究の素材として利用する手法が広まりつつある。最も顕著な事例の一つが『蒋介石日記』（1917-1972）の公開と利用であり、間違いなく民国史研究に新たな潮流をもたらした。

『蒋介石日記』を素材とした近代史研究には、いくつか注意すべき点がある。

一、日記は確かに歴史の細部の理解と認識の助けとなる。『陳誠日記』『陳克文日記』を利用することで、第二次大戦期の孔〔祥熙〕一族の行動に議論すべき点がないわけではなかったことが見て取れるが、『蔣日記』を見



るとやはり類似した批判がある。国軍の軍紀の乱れについて、その原因の一つは軍人が商業に従事する悪習にあり、これは蒋介石が軍人は商売をしてはならないと繰り返し訓戒した理由である。1948・1949年の国民政府〔ママ〕の危機について論じれば、『胡宗南日記』と『蒋介石日記』の比較を通じて、両者の重慶と成都、西昌の防衛問題に対する主張の落差を見て取ることができる。蒋介石の威厳と個性のため、周囲に直接諫言できる人物は少なかった。楊永泰、張治中、熊式輝はそれができた三人である。主に『熊式輝日記』に依拠した『海桑集』は、蔣には「一つの権限を二人に持たせる」「他人に牽制させる」「越権指揮」という悪癖があったことを指摘しており、これは蔣が1949年前後の内外の相継ぐ非常事態に際し失敗した原因の一つだった可